

MfG\_J\_Ryoukan\_and\_impermanent\_Presen



## 良寛さんの「諸行無常」

2022年1月

春日

## 良寛 災難に逢うがよく候

災難に逢う時節には

災難に逢うがよく候。

死ぬ時節には死ぬがよく候。

是ハ災難をのがるゝ妙法にて候。

## この文を、どう理解するか（真意は）

ぞんざいな言葉と思われがちですが、無事を案じた  
極く親しい友からもらったお見舞い状への良寛さんの  
返書の一部であると知ると、見方が変わります。

手紙全体としては、不幸の渦中にあった友に、  
『仏様に、おまかせしましょう』というような、いつもの、  
やさしい口調のことばで、伝わるものではなかったか、  
と思うのです。

## 良寛 災難に逢うがよく候

お見舞いの返事であるが、  
そのなかに、仏教の根本を  
云っているではないか。

身近な言葉を拾ってみますと・・・

新井石禅師 サフラン酒・離れの書

般若心経のこころ

ブッダの辞世句や「無常偈」

原始仏教の根本

世間虚仮、唯仏是真 聖徳太子の言葉

歎異抄（唯円著、親鸞の語録）  
蓮如の御文章 白骨の章

## 新井石禅師 サフラン酒・離れの書

心は大山の如く 八風を受けて動ぜず  
量は大海の如く 衆流を容れて漏さず  
人生を夢と観すれば 悲しみもなく 苦しみもなし  
萬事を空と悟りてこそ 花もあれ実もあれ

量(かさ)、衆流(しゅうる)

この「夢」、「空」という言葉を、  
どう捉えるかが、大事なところ。

般若心経の冒頭の文字の「空」

摩訶般若波羅蜜多心経

觀自在菩薩 行深般若波羅蜜多時

照見五蘊皆空 度一切苦厄 舍利子

色不異空 空不異色 色即是空 空即是色

諸行無常

諸法無我

涅槃寂靜 以上、三法印。

これらに一切皆苦を加え、四法印。

類義語として、五蘊皆空(ごうんかいこう)

般若心経の「照見五蘊皆空」。

空(あらゆる現象や存在は縁起によって成り立っていて、永久不変の実体がないということ。)



## ブッダの辞世とされる句

「いかなるものも移ろい行く。  
怠ることなく努めよ」

( … さすれば、悟りに至るであろう )

前半は「無常」の教えを、後半は「不放逸」の実践を示したものと、されています。

「不放逸」とは、なげやりの心でなく、専心に善行を為すこと。

## 仏の教え、仏法の根本を説いている「無常偈」

諸行は実に無常なり　（諸行無常）  
生じ滅する性質のもの　（是生滅法）  
生じてはまた滅しゆく　（生滅滅已）  
その寂滅は安樂なり　（寂滅為樂）  
（長部第16『大般涅槃經』）

いろは歌は、この涅槃經にある四句の偈、  
「無常偈」の意を詠んだものと、されています。

## 世間虚仮、唯仏是真

「この世は仮のもの、この世は幻のようなもので、全ては絶えず変わっていくもの。そのなかで、唯仏だけは、変わらない真。」

～ 天寿国繡帳に織り込まれたことで  
今に伝わる、聖徳太子のことば。

## 寂滅為樂

「寂滅」は煩惱の消え去った  
究極的な悟りの境地であり、  
そこは安樂の世界である。

石禅さんの詩も、ブッダの辞世の句も、  
良寛さんの「災難に逢うがよく候」と  
同じことを言っていたのです。

## 親鸞 歎異抄（唯円著、親鸞の語録）

煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、  
よろずのこと皆もって、  
空事・たわごと・真実あること無きに、  
ただ念仏のみぞまことにておわします

（よろずのこと、みなもって、  
そらごとたわごと、まことあることなきに、）

## 蓮如の御文章 白骨の章

「朝には紅顔ありて、夕には白骨と  
なれる身なり」・・・

・・・「人間のはかなき事は老少不定の  
さかいなれば」・・・

The person who was cheerful  
on that day got to live the day  
incidentally.

Therefore, someone, or someone  
might be you, with a rosy figure in a  
morning would end up with white  
ashes in the evening.

これらには、みな同じ想いが含まれているように思います。

特に「諸行無常」に近いように感じて、  
ただ、むなしさをいうのではなく、  
苦を乗り越えて生きよと諭してもいるような  
気がします。



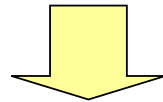
## 漢訳 諸行無常

初期仏教の仏典『法句経』(ほつくぎょう)、  
パーリ語で『ダンマパダ』に出でくる言葉

「こと・ものの全て無常なり」と智慧を持って  
見通すときにこそ、実に苦を遠く離れたり。  
これ、清浄(しょうじょう)にいたる道なり。

「諸法無我」色々なこと(諸法)に我は無い  
「諸行無常」すべてのものは、変化し続ける

大自然から恵まれるものは勿論、生じる結果を  
全て当然として素直に受け取るしか無いし、  
それが真実の実践(現成公案)だと考えるしかない  
のである。



その実践のひとつとして、  
「災難に逢う時節には災難に逢うがよく候、  
死ぬ時節には死ぬがよく候、  
是はこれ災難をのがるる妙法にて候」  
と自身を含め、諭したとしたいのです。

以後、自説です。

空 二 諸行無常、諸法無我

そういう現世だからこそ、(八正道のうち、)  
特に人との関わり方を大切に、ということで、  
皆いっしょ、人に優しく、という仏教の  
基本があるのだと、信じます。

子供を亡くし悲嘆にくれる友人に、それとなく  
心を配った言葉だったと気づくのです。

～ 日頃、見聞きする禅語にも、  
同じ精神を詠むものが多そう。

日々是好日 （にちにちこれこうにち）

いろいろな解釈がありますが、  
山あり谷ありの人生ではあるが、でもやはり  
今一日、また一日が良い日であれと考えよう。  
～ どのような場面に出遭おうとも、悟りの心に  
徹して生活できる人は、幸せなのではないか。

（中国北宋晩期に成立した禅宗語録、碧巖録 のなかの言葉）

## 道元の「愛語」、親鸞の「和顔愛語、先意承問」

愛語は、良寛さんの代名詞のような言葉です。親鸞が最も重視した經典「無量寿經」でも、和顔愛語、先意承問が説かれ、主著の「教行信証」でも繰り返し引用しています。道元も主著「正法眼蔵」の「菩提薩四摂法」の章のなかで、愛語を説いています。

近代仏教の主題のひとつだと思うのです。

道元・良寛		親鸞
菩薩の行・四摂法		法蔵菩薩のころ
愛語 同事 布施 (利行)	利行	和顔愛語 先意承問 小欲知足 志願無倦
正法眼蔵		教行信証 (仏説無量寿経)

道元の「愛語」を読むと、無量寿経・親鸞の「和顔愛語、先意承問」が含まれていることがわかります。

## 私の思う『手紙の真意』

災難に逢うがよく候 の手紙には、  
仏教の根本の「諸行無常」、「諸法無我」が  
あり、その厳しく見える言葉の奥に  
「和顔愛語」、「先意承問」の心がある。

この世界を、どう認識するか

その社会で、どう生きるか

完



